

総説

医学中央雑誌からみたクリティカルケア看護領域における 家族看護の研究動向と今後の課題

織田知穂¹⁾ 尾原喜美子²⁾

(高知大学大学院総合人間自然科学研究科看護学専攻修士課程¹⁾)

高知大学教育研究部医療学系医学部門²⁾)

Family nursing in critical care nursing research trends
and future challenges by using Ichushi-Web

Chiho Oda¹⁾ Kimiko Ohara²⁾

(Kochi University Graduate School of comprehensive human natural science research

Department of Nursing Department of master course¹⁾)

Kochi University Research and Education Faculty Medicine Unit, Medical Sciences Cluster²⁾)

要 旨

クリティカルケア看護領域における家族看護の研究動向と今後の課題を明らかにするため、文献研究を行った。医学中央雑誌 Web 版を用い、1983年から2009年までに発表された原著論文149件を対象とした。結果、クリティカルケア看護領域における家族の実態やニーズについては明らかになってきており、家族アセスメントツールの開発・検証も進んでいた。今後はそれらツールの検証とツールを用いた具体的な援助の開発、介入・評価研究による新たな援助の開発、援助の効果の測定や改善が求められている。また、倫理的ジレンマを抱える看護師自身に対するケアの開発、看護学教育への還元なども求められているということが示唆された。

キーワード：クリティカルケア、ICU(Intensive Care Unit)、家族、看護

Abstract

Did a literature study, to identify family nursing in critical care nursing research trends and future challenges. The subject of this research was the original paper 149 by using Ichushi-Web, from 1983 to 2009. As a result, the realities and needs of families in critical care nursing is becoming clear, and was going to develop and verify family assessment tool. In the future, we will expect to verify that tools, to develop a concrete support by using validation tools, development of a new support by intervention research, and to improve support by measuring an effectiveness. That suggests it is sought, the reduction to the development of care for the nurses themselves facing ethical dilemmas, nursing education.

受付日：2010年6月28日 受理日：2010年10月4日

Keywords: Critical Care, ICU (Intensive Care Unit), Family, Nursing

【緒 言】

ER (Emergency Room、以下 ER とする) や ICU (Intensive Care Unit、以下 ICU とする)・CCU (Coronary Care Unit、以下 CCU とする) などのクリティカルケア看護領域では、突然の疾病や事故により生命の危険にさらされた重症患者が多く、患者はもとより家族も心理的危機状況にさらされている。そのため、患者だけでなく家族に対する援助が重要な看護のひとつとなっている。

ICU の発展は、集中治療医学の発展に伴い進んできた。集中治療医学は1950年代に重症患者の効率的治療管理を目指して自然発生的に欧米の病院に設けられ、次第に成長分化した¹⁾。主には PPC (Progressive patient care) 方式と呼ばれる段階的的患者ケア方式の概念から成立してきた ICU が多いが、術後の回復室の延長として発展した ICU、医療の専門分化と高度化がもたらした ICU などがあり²⁾、各病院によって背景は様々である。これらの発展に伴い、かつては救えなかった命が救えるようになった。そして、今後も最先端医療 (人工心臓) や再生医療 (再生血管移植、心臓弁の移植、自己心筋細胞の再生) など、新たな治療法や医療機器の開発が進むことが予測され、ICU などの病床は今後もさらに専門分化・高度化が進むと考えられる。

このような医学の発展の中、非日常的环境である ICU において、看護師は療養上の世話と診療の補助を行ってきた。クリティカルケア看護の場では、複雑な医療処置や医療機器の操作などの診療の補助業務が大半を占めており、看護本来の役割である日常生活への援助や生活の質の保障などの援助が十分に行っていない状況がある。また、ケアの本質は患者の主体性を引き出すように働きかけるこ

とであるが、生命の危険にさらされ、疾患や薬剤により意識レベルが低下している患者がほとんどであるため、他領域では容易に得られるであろう患者からの反応が得られにくい。そのため、看護師にとって、ケアが成立しているという実感が得られにくく、患者との対等な関係を保ち続けるのが困難な場でもある。しかし、このような場であるからこそ、医療における看護のあり方の本質を問われ、専門職としての真価が問われる。井上は、治療、医学を中心に行われているこの領域でのケアリング実践は、看護の神髄を発揮すべき場所となり、その実践こそ看護を他職種と区別するものとなるであろう³⁾、と述べている。

日本では、1997年に救急看護認定看護師、1999年に重症集中ケア認定看護師 (現在は集中ケア認定看護師) が誕生した。そして、2000年にはクリティカルケア専門看護師 (現在は急性・重症患者看護専門看護師) の養成が始まり、2004年にはクリティカルケア看護学会が設立された。クリティカルケア看護学会が設立されるまでは、日本集中治療医学会、日本救急看護学会、日本看護学会—成人看護Ⅰなどが、この領域での研究発表の場であった。現在でもこれらの学会での研究発表は行われているが、クリティカルケア看護に関わる多くの看護職者が集結し、人々に貢献するクリティカルケア看護学の確立と発展を目指すことを意図してクリティカルケア看護学会が設立され⁴⁾、発展してきている。現在では多数の会員を抱える学会となり、年に1度学術集会在催され学会誌も出されている。

研究者は、3年間のICU勤務経験の中で、たくさんの患者・家族と出会い援助を行ってきた。業務にも慣れ受け持ち看護師としての役割を発揮し、退室した患者・家族が挨拶に来てくれたり家族から名前と呼ばれたりする

など、心理的距離が近づいたことで信頼関係が形成できたと感じる場面が増え、やりがいも感じていた。しかし、身体的にも心理的にも危機状況にある患者・家族と関わるにつれて、“私が行っていることは患者さんや家族を支えることになっているのだろうか”と、疑問や行き詰まりを感じるようになった。そして、クリティカルケア看護の場では患者のケアだけでなく、家族への支援も重要なのではないかと考えるようになった。

看護は、社会状況の変化にも柔軟に対応していかなければならない。少子高齢化・核家族化など社会経済的背景の変化から、家族の形態や機能は多様化している。日本に家族看護学が導入されてから約20年が経過し、看護における家族の捉え方も変化し、家族看護に対する看護師の認識も高まっている。

これまで、クリティカルケア看護領域の文献研究や、クリティカルケア看護領域の家族のニードに焦点を当てた文献研究は発表されているが、家族看護のみを対象とした文献研究はなかった。そこで、クリティカルケア看護領域における家族看護研究が、どのような対象・内容・方法で行われ、研究結果が得られているのかを概観し、看護者が担うべき具体的な支援や今後取り組むべき研究についての示唆を得るため検討を試みた。

【方 法】

1. 対象：医学中央雑誌 Web(Ver. 4)により、『ICU、クリティカルケア、家族看護、家族、看護』のキーワードを組み合わせる全年検索（1983～2009年・26年間）を行った。

『ICU・家族看護』211件、『クリティカルケア・家族看護』39件、『ICU・家族・看護』192件、『クリティカルケア・家族・看護』43件の文献が得られ、重複しているものもあった。これらの中から成人・老年期の患者の家族看

護に関する原著論文149件を抽出し分析対象とした。

2. 分析方法：得られた文献を、研究数の年次推移、研究デザイン、研究対象、研究内容の視点から分類し、概要をまとめた。研究内容分類は、研究タイトル・抄録・本文を読んだ上で、研究者がその論文の主題と感じた内容に焦点を当て、類似性の高い内容に分類した。また、クリティカルケア看護領域における文献研究の結果と比較検討した。

【結果および考察】

1. 研究数の年次推移

対象149件の年次推移は図1のようになった。1986年、1990年、1996年に1件ずつ、1998年に3件、1999年に1件みられるのみであったが、2000年以降増加しており2003年以降さらに増加していた。この背景には、看護系大学や大学院の設置が進むと同時に、1990年代から日本に家族看護学という領域が導入され（1994年に日本家族看護学会設立）看護職あるいは研究者の中で家族看護に対する認識が高まってきたことが考えられる。

2. 研究デザイン別分類

分類方法は、山勢の研究⁵⁾を参考に分類した（図1・2参照）。体験・思い・認識などの実態調査・疫学的研究が46件（31%）であり、質的記述研究が46件（31%）、事例研究32件（21%）であった。なんらかの介入を行っている介入・評価研究（準実験研究も含む）は14件（9%）、因果・相関関係検証型研究は6件（4%）であった。山勢の分類には含まれていなかったが、文献研究は5件（3%）であった。藤原らによる日本での過去5年間におけるクリティカルケア看護領域の研究の特徴⁶⁾（対象文献2003～2007年、原著論文68件）によると、量的研究が41件（60.3%）、質的研究24件（35.5%）、文献研究3件（4.4%）

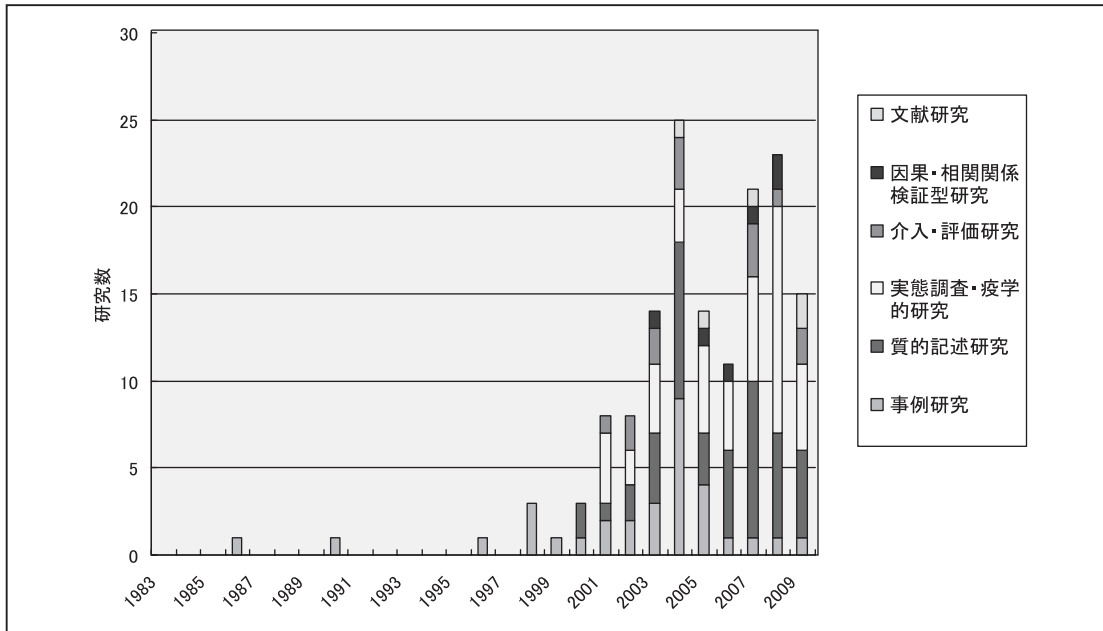


図1 クリティカルケア看護領域における家族看護研究数の研究デザイン別年次推移

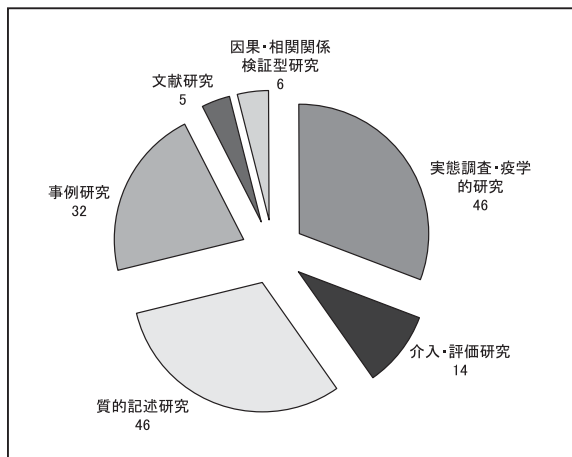


図2 研究デザイン別分類 (n=文献数)

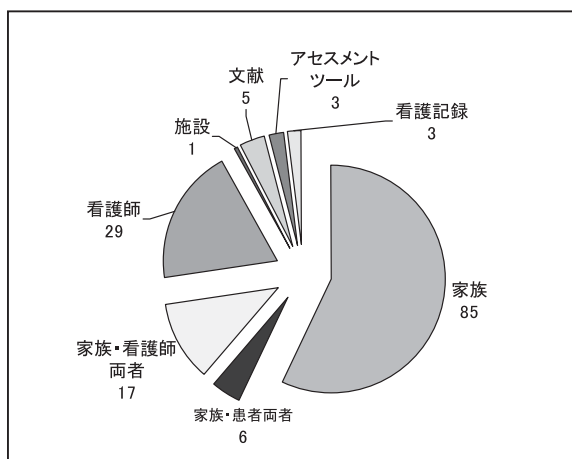


図3 研究対象別分類 (n=文献数)

で、量的研究が多かったと述べられていた。また藤原は、山勢の研究(対象文献2000~2004年、解説・会議録・レビュー以外の論文177件)と比較して質的研究が増加していたと述べていた。藤原や山勢による研究は、クリティカルケア看護の全領域を対象としているため、家族看護に限定した本研究の結果と比較するのは困難であるが、クリティカルケア看護領域における家族看護研究において質的研究の割合が高いということがわかる。

3. 研究対象別分類

研究対象別分類とは、各論文が研究対象としている人(看護師・患者・家族)物(記録物・アセスメントツール・文献)施設(病院)という視点での分類である(図3参照)。家族を対象としたものが85件(58%)と最も多く、次いで看護師を対象としたものが29件(19%)と多かった。家族・看護師両者を対象とした研究は17件(11%)であり、その中で家族のニーズと看護師の考えるニーズのずれについての研究が5件みられた。2002年から急性期における家族アセスメントツールで

ある CNS-FACE（Coping and Needs Scale for Family Assessment in Critical and Emergency Care Settings、以下 CNS-FACE とする）も開発され、ツールの検証を行う研究や共通のツールを用いた研究もみられるようになった。施設を対象とした研究では、術中訪問への取り組みについてのアンケート調査が 1 件のみであった。施設によって家族看護に対する認識や捉え方に大きな差が見られた。

4. 研究内容別分類

研究内容別分類では、図 4 のように分類された。研究タイトルや研究内容から類似性の高い内容に分類していった。分類の結果、「家族看護の現状と認識」が 42 件（28%）と最も多く、次いで「ケア内容」36 件（24%）、「家族のニード」28 件（19%）、「家族の実態」22 件（15%）、「ツール関連」17 件（11%）、「看護師のジレンマ」4 件（3%）という順になった。各研究内容別分類詳細を表 1 に示す。以下、研究内容別分類詳細に沿って動向をまとめる。

「家族看護の現状と認識」とは、家族や看護師が家族看護についてどのような認識を持っているか、また、家族看護の現状についてなど、広義的な家族看護についての研究である。内容は、家族の認識を調査したもの 4

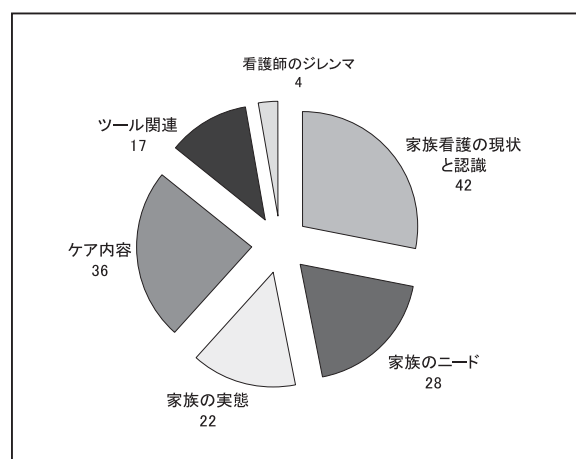


図 4 研究内容別分類（n = 文献数）

件、看護師の認識を調査したもの 10 件、家族の満足度調査と看護師の自己評価を調査したもの 5 件、看護の振り返り 19 件、その他、看護記録や文献を対象とした研究 4 件であった。今岡らによる重症集中ケア認定看護師 14 名を対象とした研究⁷⁾によると、重症集中ケアにおいては「家族と患者に距離が生まれる」可能性が高く、「家族は患者を手元に取り戻す」ことを目的とした家族看護介入を行うことが必要であると述べられていた。また、工藤らによる家族 33 名を対象とした研究⁸⁾によると、看護実践に対する家族の評価が低かった下位 5 項目（実施率が低い、あるいは、ほとんどないと評価された項目）は、ケアへの参加希望、ケアに参加可能であることの説明、医師の説明時同席、医師の説明に対する補足説明、看護師の自己紹介であったと述べられていた。

「家族のニード」では、家族の持つ全体的なニードの実態調査、情報や面会など特定のニードに関する研究、家族と看護師の認識するニードのずれに関する研究などがみられた。ニードのずれに関する研究では、Molter の 45 項目の重症患者家族のニードを参考に作成した質問紙により、家族のニードと看護師が考える家族のニードを調査し比較したものがみられた。浦野らの研究⁹⁾では、「面会時、受け持ち看護師と話せること」という項目では家族のニードが看護師の認識より有意に高く、「近くに支えとなる人がいること」では看護師の認識が家族のニードより有意に高かった、と述べられていた。また、小松らによる研究¹⁰⁾では、看護師が考えるよりも高い家族のニードは「病床で何をしたらいいか指示してもらうこと」「患者の身体的ケアを手伝うこと」であった、と述べられていた。看護師は家族が何を望んでいるか考えながらケアを提供しているが、看護師個人の経験や家族観によってニードの捉え方は異なってい

表1 研究内容別分類詳細

研究内容	研究内容詳細	タイトル	研究者	雑誌名・巻・号・ページ	発行年
家族看護の現状と認識	家族の認識	生命の危機的状況に陥ったとき、向老・老年期にある患者家族が望む援助 向老・老年期にある人の自由記述内容の分析より	木村千代子, 水木暢子, 山口かおる	看護実践の科学 33巻4号 P68-72	2008
		集中治療室における家族看護の実践と家族による評価	工藤由美, 田中千鶴子, 曾我辺洋子, 他	昭和大学保健医療学雑誌 5号 P1-8	2008
		手術を終えたがん患者の家族が求める看護援助について	大家尚美, 瀧井慎司, 東原浩子, 他	日本手術医学会誌 23巻4号 P399-400	2002
		重症患者の家族が集中治療室の看護婦・士へ話すことに影響する因子の考察	成田晴美	神奈川県立看護教育大学看護教育研究集録 25号 P497-504	2000
	看護師の認識	看護師の家族看護における認識と実際	中村朱芳, 郡司聖季, 中尾由佳	日本看護学会論文集: 成人看護 II 39号 P48-49	2009
		生命危機的状況にある患者家族への積極的チーム・アプローチがもたらす看護チームの認識と実践の変化 ミュチュアル・アクションリサーチの手法を参考に	野口秋子, 楢原紗恵子, 栗城尚之, 他	日本救急看護学会雑誌 11巻1号 P41-49	2009
		重症救急患者家族への看護介入状況の実態	畑貴美子, 石川智子, 八重樹真由美, 他	日本看護学会論文集: 成人看護 I 38号 P243-245	2008
		脳血管疾患専門病棟急性期における家族看護の現状分析 「CNS-FACE」のニードとコーピングの測定概念」を基にした分類結果より	本間玲央, 佐々木あい, 原田有果理, 他	日本看護学会論文集: 成人看護 I 38号 P9-11	2008
		集中治療室における看護師の家族援助とICU経験年数との関連	松浦恒仁, 吉村不二子, 高田奈緒, 他	富山大学看護学会誌 7巻2号 P1-6	2008
		重症集中ケアにおける家族看護過程の特徴	今岡万里, 泊祐子	家族看護学研究 12巻3号 P125-132	2007
		看護・介護の視点から 重症患者家族への看護介入状況と問題点の明確化	畑貴美子, 石川智子, 八重樹真由美, 他	地域医学 21巻12号 P1130-1132	2007
		重症患者家族のニーズに関する看護師の認識の実態と関連要因の探索	福田和明, 黒田裕子	日本クリティカルケア看護学会誌 3巻2号 P56-66	2007
		頭頸部拡大急性期患者をもつ家族への看護	垣内さおり, コニユウ聡子, 和気歌子, 他	中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌 1巻 P122-125	2005
		ICU入室患者家族対応における看護師の考えと行動の調査報告	松本由起子	中瀬病院年報 4号 P84-86	2004
	家族・看護師両者の認識	ICUでの面会における患者家族と看護師の認識について	卯野祐治, 福島絵美, 藤生裕紀子, 他	群馬県救急医療懇談会誌 3巻 P41-44	2007
		集中治療室入室患者の家族に対する援助の看護士の意識変化 看護士の意識調査と家族の満足度調査からの考察	吉田真弓, 渡嶋昌恵, 古川圭美, 他	日本看護学会論文集: 成人看護 I 37号 P152-154	2007
		当ICU・CCU病棟における家族援助の課題 家族の満足度と看護士の自己評価からの検討	星直子, 荒川靖子, 小暮亜由美, 他	日本看護学会論文集: 成人看護 I 33号 P169-171	2003
		ICU入室患者家族への対応改善後の評価 満足度向上への2年間の取り組み	小林宣子, 小倉由子, 山手礼子, 他	日本看護学会論文集: 成人看護 I 32号 P57-59	2002
		入院当初における脳神経疾患患者の家族への対応 家族および看護士に行ったアンケート調査より	井比奈子, 川上弘美, 石塚美穂子, 他	日本看護学会論文集: 成人看護 I 31号 P42-44	2001
		看護の振り返り	救急医療における家族看護 ナラティブ・アプローチのプロセスで果たす看護士の役割	吉田由紀	看護教育 50巻8号 P712-715
	緊急入室・生命の危機的状況にある患者の家族の援助 Aguilera と Messick の問題解決モデルを用いて		泉水真紀, 松木恵里, 福地本晴美, 他	ICUとCCU 31巻11号 P972-976	2007
	亡くなった姉と同じ疾患を突然発症し、緊急入院となった患者の家族看護		安永幸枝, 井ノ口美和	EMERGENCY CARE 18巻12号 P1184-1189	2005
	家族全員が危機的状況に陥った事例から看護介入のあり方を振り返る		松田京子, 河村千恵子, 松尾桂子, 他	山口県看護研究学会学術集会プログラム・集録 4回 P42-44	2005
	CASE STUDY 生命の危機的状況にある患者家族への看護介入を通して 救急場面上における基本的家族援助の必要性		高倉加代, 水野つづみ, 小田原良子	エマージェンシー・ナーシング 17巻6号 P594-599	2004
	自殺企図により一酸化炭素中毒となった患者及び家族の援助		佐々木健一	エマージェンシー・ナーシング 17巻7号 P681-686	2004
	急激な状態の悪化を来し、生命の危機的状況に陥った患者家族への看護		畑中保子	ハートナーシング 17巻10号 P985-989	2004
	危機的状況に陥った家族の援助		国塚和恵, 増井かおり, 川村未樹, 他	ハートナーシング 17巻7号 P676-679	2004
	緊急入院により不安を抱いている家族への看護介入 4年目の看護師としての援助のあり方		田中強子, 佐々木邦子, 茂木和子, 他	甲信救急集中治療研究 20巻1号 P5-7	2004
	集中治療室に緊急入院した患者家族と看護師の人間関係をベロブローの看護理論を用いて検討した事例		岩田美津枝, 渡部唯, 小川真理, 他	松江市立病院医学雑誌 8巻1号 P55-58	2004
	長期呼吸管理が必要な重症心不全患者の日常的回復にむけての看護介入		知久博美, 樋口周子	ICUとCCU 27巻6号 P593-595	2003
	精神的危機的状況に陥った家族への看護介入 家族システム理論を用いた分析		佐藤麻美, 宮地富士子, 藤井弥生, 他	エマージェンシー・ナーシング 16巻11号 P1076-1085	2003
	【疾患におけるクリティカルケア】 クリティカルケアにおける家族看護の実際		仁科典子	ハートナーシング 16巻9号 P919-922	2003
	クリティカルケアを受ける患者の家族ケア 危機状況に陥るリスクがある家族への援助		北村愛子, 高見沢恵美子, 福寿祥子	ハートナーシング 15巻10号 P1080-1086	2002
	カルガリー-家族介入モデルを活用した看護ケアの検討 複数の疾患をもち直腸癌術後に硬膜下血腫を併発した事例を通して		石坂聖子, 藤野文代, 林かおり	The Kitakanto Medical Journal 51巻1号 P43-47	2001
危機に陥った患者とその家族の看護	永田千香子, 中野由美子, 柳田千春, 他		ハートナーシング 11巻6号 P523-527	1998	
ICU領域における家族看護の必要性とその課題を考える ICUでのK氏とその家族への関わりを通して	川初佐知子		神奈川県立看護教育大学校事例研究集録 21巻 P25-28	1998	
看護婦の患者家族へのかわり方 家族が不信感を訴えた1例を通して家族に対する看護婦の役割を考える	柴田美弥子, 平井温子, 加賀良子		日本救急医学会関東地方会雑誌 19巻2号 P708-709	1998	
集中治療中の患者の家族へのかわり方	大保なおみ, 迫村弓子, 唐仁原道子		看護実践の科学 15巻8号 P96-100	1990	
その他	日本での過去5年間におけるクリティカルケア看護領域の研究の特徴		藤原正恵, 岩山朋裕, 穴吹浩子	インターナショナルナーシングレビュー 32巻1号 P96-100	2009
	クリティカルケアにおける患者の家族のニード 海外における研究の動向と我が国との比較、周手術期患者の家族看護への示唆	高橋美奈子, 中島恵美子	日本クリティカルケア看護学会誌 3巻2号 P102-110	2007	
	集中治療室における看護ケアの機能分析 過去15年間の原著論文から	岡本亜紀	新見公立短期大学紀要 26巻 P161-172	2005	
	O大病院のICUにおける家族看護の課題 看護記録からの分析	渡邊久美, 竹内加恵, 岡野初枝	岡山大学医学部保健学紀要 15巻1号 P23-28	2004	
家族のニード	心臓血管外科の術後急性期における家族看護についての現状と課題	川口由紀子, 田邊美香, 門間智子, 他	日本看護学会論文集: 成人看護 I 39号 P199-201	2009	
	集中治療室へ緊急入院した患者家族の抱えるニードの重要度と満足度調査 Molterの重症患者家族ニードを用いて	高辻靖子, 藤田崇博, 藤野涼子	日本看護学会論文集: 成人看護 I 39号 P30-32	2009	
	集中治療室への緊急入院患者家族のニードの経時的変化 Molterの重症患者家族ニードを用いて	浅田純子, 常木理江, 今宮恵, 他	日本看護学会論文集: 成人看護 I 38号 P191-193	2008	
	24時間面会可能な救命救急センターにおける重症患者家族のニーズと充足度	春川一樹, 若佐有華, 大島紀子, 他	日本看護学会論文集: 成人看護 I 37号 P134-136	2007	
	面会制限のないICUにおける患者家族のニード	今川博子, 福嶋望美, 上岡澄子	日本看護学会論文集: 成人看護 I 37号 P146-148	2007	
	ICUにおける家族ニードの実態調査 コミュニケーションノート进行分析して	佐野郁, 山本公代, 兵頭かおる, 他	日本看護学会論文集: 成人看護 I 35号 P220-222	2006	

医学中央雑誌からみたクリティカルケア看護領域における家族看護の研究動向と今後の課題（織田・尾原）

家族の ニード	ニード全体	急性期における頭部外傷患者の家族のニード	岩井智子, 石川ふみよ, 畠中敏江, 他	日本救急看護学会誌 6巻2号 P23-29	2005
		重症患者家族のニードに対する支援 満足度調査の結果から	小田切幸子, 池松裕子	山梨県立中央病院年報 31巻 P55-57	2004
		緊急入院した患者の家族の医療従事者に対するニードを知る Molter のニード論を使って	竹内真由美, 笹倉頼子, 内橋裕美, 他	西脇市立西脇病院誌 3号 P73-86	2003
		「連絡ノート」から見た ICU 入室患者家族のニードの分析	朝川恵子, 内藤里果, 岩佐忍, 他	日本看護学会論文集: 成人看護 32号 P193-195	2002
	情報のニード	ICU 入室患者の家族が望む情報 入室期間・入室形態からの分析	竹村圭以, 畑山峰, 小原美紀, 他	日本看護学会論文集: 成人看護 38号 P36-38	2008
		ICU に緊急入院した患者の家族看護 看護診断開示にむけて	鳥巣亜希子	鈴鹿中央総合病院雑誌 11号 P3-4	2005
		脳血管疾患により救急入院した患者家族の心理と情報提供に関するニード	鎌田梨愛, 中川雅子	三重看護学誌 6巻 P121-136	2004
	面会のニード	面会時間拡大に関連した看護師の面会に対する理想的考え方と面会の実態	野田浩美	神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録 33号 P22-29	2008
		重症療養病棟での面会者の年齢制限廃止の効果 面会による患者家族の満足感及びトラブルの調査から	吉田真弓, 中尾知映, 下出弘美, 他	日本看護学会論文集: 成人看護 38号 P246-248	2008
		ICU で家族が安心して寄り添えるための看護	後藤保世, 中村真理子, 前田鈴子, 他	日本看護学会論文集: 成人看護 37号 P161-162	2007
		ICU・ICUJ における手術終了後の面会方法と看護介入について考える 面会に対する家族ニードの実態調査から	岸ひるみ, 保田佳紀, 下小牧明香, 他	臨床看護 33巻7号 P1097-1102	2007
		集中治療室における患者, 家族の属性と面会満足感との関連	阿部桃子, 櫻井かおり, 松田みち子, 他	ICU と CCU 27巻4号 P319-324	2003
		患者家族が面会に求めるもの 面会時間を変更して	木村貴美子, 塚本順子	静岡県立総合病院医学雑誌 17巻1号 P83-89	2003
		重症患者家族への面会時の対応とニードについての検討	池田成美, 鹿島寿子	日本看護学会論文集: 成人看護 33号 P146-148	2003
保証のニード	ICU 入室患者家族の面会ニード 患者家族・看護者の意識調査から	井上美穂, 小林豊子, 佐藤文子, 他	日本看護学会論文集: 成人看護 31号 P57-59	2001	
	救急・重症集中ケアにおける家族看護 家族ケアにエビデンスを求めて 集中治療室に入室した患者の家族が持つニーズ-保証のニーズ充足に影響する要因について	神明直美, 本田彰子	エマーゼンシー・ナーシング 16巻4号 P320-324	2003	
ニードのずれ	ICU 入室患者家族への情報提供の重要性 Molter の「重症患者家族のニード」を利用したアンケート調査の結果から	浦野曜, 清口奈見子, 生駒音美	日本看護学会論文集: 成人看護 37号 P158-160	2007	
	特定集中治療室における家族援助の検討 患者家族と看護師のニード調査からの分析	山口由香, 吉原佳美, 河野裕見子, 他	日本看護学会論文集: 成人看護 35号 P112-114	2005	
	集中ケア病棟での面会時における患者家族のニーズと看護師の認識の違い	高橋有美, 奥村美穂, 生駒知栄, 他	日本看護学会論文集: 成人看護 35号 P231-233	2005	
	CCU に緊急入院した患者の家族に対する援助の検討 Molter の重症患者家族ニードの活用	小松さゆり, 齋藤真由美, 柿崎敦子, 他	秋田県農村医学会誌 50巻1号 P9-11	2004	
ニード&コーピング	ICU 入室患者の緊急・緊急入室患者と予定入室患者の家族のニードとコーピング	新田優子, 室端志津, 濱谷滋子, 他	日本看護学会論文集: 成人看護 31号 P54-56	2001	
	ICU へ入室する救急・緊急入室患者と予定入室患者の家族のニードとコーピング	江尻晴美	日本集中治療医学会雑誌 13巻4号 P437-444	2004	
家族の実態	家族の心理	急性期の鎮静処置を受けている患者の家族の思い ICU 面会時に焦点をあてて	亀山千里, 加藤令子, 井澤伸拓, 他	日本看護学会論文集: 成人看護 39号 P193-195	2003
		医療者に対する不信感を持つ心筋梗塞患者の家族の思い	新山悦子, 天本夏代, 岡本真由美, 他	看護・保健科学研究誌 8巻1号 P221-230	2008
		急性期にある高齢脳卒中患者をもつ家族のストレスに関する研究 ストレッサーの構造とストレス反応との関連	峠美恵子	日本保健科学学会誌 10巻4号 P224-232	2008
		意識障害患者の ICU 退室により生じる家族の困難と看護支援に関する研究	古賀雄二, 井上智子	日本クリティカルケア看護学会誌 3巻2号 P34-42	2007
		集中治療室に緊急入院してきた患者家族の入院当初の気持ちを知る	佐々木望, 井上聡子, 谷口重紀, 他	日本看護学会論文集: 成人看護 37号 P155-157	2007
		集中治療室入室患者家族の初回面会までの思い インタビューを通して家族援助のあり方を検討する	関子早地子, 柿元千賀子, 小林由紀, 他	日本看護学会論文集: 成人看護 37号 P311-313	2007
		心疾患を発症した壮年男性患者の妻の心理的危機プロセス	嶋山浮子, 井上麗江, 児玉有子	日本クリティカルケア看護学会誌 1巻3号 P25-34	2006
		救急重症患者家族の思いと行動 搬入前・初療時・入院後	橋田由史, 大森美津子	日本クリティカルケア看護学会誌 1巻3号 P46-59	2006
		ICU に緊急入室した患者家族の心理の考察	矢野由香里, 田中康代, 青木恵美, 他	日本看護学会論文集: 精神看護 38号 P264-266	2006
		STAI を用いた不安の調査 突然発症した脳疾患患者の家族の不安について	高橋美帆, 岩永ちずえ, 中林弘子, 他	福井県立病院看護部研究発表収録 平成18年度 P39-44	2006
		心臓手術患者の家族支援に関する研究 家族の患者への思い, 医療者の対応への思い	青山みどり, 二波玉江, 榎矢裕子, 他	ハートナーシング 17巻3号 P264-288	2004
		ICU 緊急入室患者の家族員の情緒的反応に関する研究	緒方久美子, 佐藤雅子	日本看護学会誌 24巻3号 P21-29	2004
		当院 ICU・CCU における緊急入室時家族心理の考察 家族に行ったインタビューより	佐藤陽子, 中里亜紀子, 高橋静穂	日本看護学会論文集: 成人看護 34号 P170-172	2004
		患者家族が望む集中治療室 (ICU) の看護 患者家族の不安4症例の分析	中野由美子, 松下麻里子, 田中久美子, 他	聖隷浜松病院医学雑誌 3巻1号 P41-44	2003
家族の体験	意識障害患者の家族が辿る心理社会的体験の記述と看護支援 突然に発症したくも膜下出血患者の配偶者の一事例に基づく探究	榎松久美子, 黒田裕子	日本クリティカルケア看護学会誌 2巻2号 P89-97	2006	
	心臓外科手術を受けた患者家族の主観的体験に関する研究 手術決定から回復期に焦点をあてて	大場由香, 村井麻子	ハートナーシング 17巻9号 P891-899	2004	
	救急医療において患者に代わり延命治療の実施に関する意思決定を行う家族への医療者のかかり関する研究の現状	中村美鈴, 水野照美, 山本洋子, 他	自治医科大学看護学ジャーナル 6巻 P161-164	2003	
家族の意思決定	渡航心臓移植を選択した患者家族の意思決定プロセスと影響要因	渡邊朱美, 井上智子	日本クリティカルケア看護学会誌 4巻2号 P16-26	2008	
	生命危機状況にある患者の代理として家族が行う治療上の決断	相浦桂子, 黒田裕子	日本クリティカルケア看護学会誌 2巻2号 P75-83	2006	
	集中治療中の患者の代理意思決定をしなければならぬ家族が必要とする情報	森本朱実, 高見沢恵美子	ハートナーシング 18巻4号 P363-371	2005	
家族システム	救命救急センター入院患者の家族システムの健康に関する記述的研究	榎由里	日本クリティカルケア看護学会誌 1巻3号 P60-70	2006	
ケア内容	ターミナルケア	ICU での看取りと死を迎える患者・家族に対する看護師の思いの分析	稲谷理沙, 田中真弓, 磯本暁子, 他	日本看護学会論文集: 成人看護 37号 P128-130	2007
		集中治療室 (ICU) における終末期に対する看護師の意識	駒井京美	神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録 31号 P243-250	2006
		母親の看取りにおける小児への援助の1事例 カルガリー家族看護モデルを用いて	菅原かおり, 川井正子, 和田祥訪子, 他	日本看護学会論文集: 成人看護 34号 P76-78	2004
		海外のクリティカルケアの場におけるターミナルケア	小手川良江, 山勢香江	日本赤十字九州国際看護大学 Intrmnr	2004
		救急治療室ターミナル・ケアにおけるナースの意識について	木本佳恵, 倉石哲也	ホスピスケと在宅ケア 11巻3号 P309-313	2003
		集中治療室 (ICU) での終末期における看護行為 一般病棟との相違	高野里美	臨床死生学 8巻1号 P26-35	2003
		「HEART nursing」で振り返るあなたのケア ICU における看護者の機能の検討 ICU で死を迎えた4症例の患者・家族への看護を振り返って	石川訓子, 榎地美佳, 岩谷佳苗	ハートナーシング 15巻9号 P958-961	2002

ケア内容	ターミナルケア	ICU(集中治療室)の終末期ケアを困難にする要因 ICU看護師の調査結果から	高野聖美	死の臨床 25巻1号 P78-84	2002
		ICUにおける終末期で意識のない患者へのその人らしさを大切に看護について	濱本泰子	神奈川県立看護教育大学看護教育研究集録 25号 P365-372	2000
		家族ケアの大切さ 進行肺癌に脳梗塞を併発しICUに入室した1例を通して	大塚千秋	ホスピスケアと在宅ケア 7巻1号 P75-77	1999
		ICUにおけるターミナル患者の家族に対するプライマリナーシングの1症例	横山菜美, 武田朋子, 熊谷陽子, 他	日本救急医学会関東地方会雑誌 17巻2号 P718-719	1996
		家族危機との出会いからみたクリティカル・ターミナルケア ICUにおいて脳死を宣告された事例を分析して	村松静子	看護実践の科学 11巻6号 P48-55	1986
	エンゼルケア	クリティカルケア領域におけるエンゼルケアの現状と課題 看護師へのアンケート調査からの分析	福田友秀, 平山明生, 増子香織	日本看護学会論文集:成人看護 39号 P24-26	2009
		急性期特定・地域医療支援病院SCUの緊急入院時のインフォームド・コンセントの現状と課題	丹山直人	日本看護学会論文集:看護総合 39号 P125-127	2008
		ICUでの看護計画説明に対する家族の思いと今後の課題 アンケート調査結果からの分析	小林千恵	日本看護学会論文集:成人看護 38号 P30-32	2008
		ICUにおける患者・家族に対する効果的な看護計画共有に向けた取り組み 患者・家族のニーズ調査と看護師への意識調査をおこなって	原口住寿美, 濱田智美, 西一美, 他	日本看護学会論文集:成人看護 37号 P314-316	2007
		Emergency Case 緊急入院患者の家族に対するインフォームド・コンセントの検討 キーパーソンの精神的援助	橋本邦子	EMERGENCY CARE 18巻9号 P892-896	2005
精神的ケア	集中治療室に入室した患者の家族への援助 ニードにそった情報提供を試みて	高木由美子, 佐藤はるみ, 佐東浩子, 他	日本看護学会論文集:成人看護 32号 P60-61	2002	
	ICUでの状態説明に関する家族のニーズとケアの標準化	井口桂子, 戸澤礼, 萩沼裕子	日本救急医学会関東地方会雑誌 22巻 P310-311	2001	
	ICUにおける患者・家族に対する精神面への関わり 看護師の思いを分析して	吉川朱実, 山川留美, 内山道子	日本看護学会論文集:成人看護 39号 P178-180	2009	
	危機的状態にある患者家族に対する精神的ケアの検討	富山絵理, 磯上由美, 小山入りか, 他	日本看護学会論文集:成人看護 39号 P39-35	2009	
	激しい感情を医療者に表してきた家族の看護	大高明子, 山下朱實	EMERGENCY CARE 18巻1号 P79-83	2005	
	ICUへ緊急入院患者の家族に対する予期悲嘆への援助	中村祐司	日本看護学会論文集:成人看護 34号 P117-119	2004	
	気管支喘息重症発作患者の家族への精神的サポート(Mental support of family members of a patient in status asthmaticus [英語])	北角洋子, 里仲むつみ, 中谷茂子, 他	監野学院紀要 15号 P53-57	2002	
	ICU退室に対して不安が強い患者家族への退室受容過程への援助	岩波道子, 宮坂和子, 田中聖江子	甲信ICUセミナー誌 17巻2号 P42-47	2001	
	面会	ICU初回面会における家族介入の意義	松田愛美, 武上優子, 奥田佐苗, 他	香川県立病院雑誌 15号 P85-89	2009
		集中治療における家族援助の検討 面会時間に関する家族アンケートから	小川哲平, 木村満夫, 木村沙智, 他	叢 39号 P123-126	2008
ICU看護師の面会時の家族援助 インタビューの結果から		高橋しのぶ, 先崎かほり	日本看護学会論文集:成人看護 38号 P197-199	2008	
抑制	クリティカル・急性期ケア看護師が認識する患者抑制の実際と抑制への思い 質問紙による研修会参加者への日米調査の比較から	井上智子, 矢富見子, 佐々木吉子, 他	日本クリティカルケア看護学会誌 4巻2号 P45-51	2008	
	急性期に抑制を受ける患者家族の苦痛に影響する因子	至穂友香子, 町田美佳, 岡岡由美, 他	徳島赤十字病院医学雑誌 12巻1号 P188-172	2007	
	ICUにおける抑制をうけている患者の家族への支援 アンケート調査による家族の思いとその関連要因	前坪瑠美子, 重光寛子, 高見亞里沙, 他	日本看護学会論文集:成人看護 35号 P115-117	2005	
ケア参加	急性期患者の抑制に対する患者家族の思い	山崎晴美, 小林明美, 田中邦美, 他	日本看護学会論文集:成人看護 34号 P44-46	2004	
	ICU入室患者の家族面会時の介入 家族が患者に触れることで生じる感情や効果	村田奈緒子, 近藤千恵子, 宮澤祐, 他	長野県看護研究学会論文集 23号 P82-84	2009	
	人工呼吸器装着中患者の反応を引き出すための関わり 患者と家族のコミュニケーションの発展を図るために	伊藤愛	大津市民病院雑誌 9号 P36-38	2008	
術中訪問	ICU患者家族のケア参加による精神的効果	千葉美香, 首藤由美子, 石川照江	愛媛県立病院医学雑誌 1巻1号 P56-59	2004	
	手術中待機している家族への支援 術中訪問の現状と課題	矢野紀子, 中西純子	日本クリティカルケア看護学会誌 4巻2号 P37-44	2008	
	ICU患者家族のニーズの抽出とニーズ測定尺度の開発	辰巳有紀子, 羽尻充子, 中村尚美, 他	日本集中治療学会雑誌 12巻2号 P111-118	2005	
ツール関連	CNS-FACE 開発・検証	CNS-FACE 家族アセスメントツールのコードに関する内容的妥当性の検討	立野淳子, 山勢博彰, 田代明子, 他	日本救急看護学会雑誌 10巻1号 P15-24	2008
		重症・救急患者家族のコードとコーピングに関する構造モデルの開発 コードとコーピングの推移の特徴から	山勢博彰	日本看護研究学会雑誌 29巻2号 P95-102	2006
		救急・重症集中ケアにおける家族看護 家族ケアにエビデンスを求めて 完成版CNS-FACEの信頼性と妥当性の検証	山勢博彰, 山勢香江, 石田美由紀, 他	エマーゼンシー・ナーシング 16巻4号 P324-326	2003
	CNS-FACE による調査	入室経路の違いによるICU入室患者の家族のコードとコーピングに関する調査 CNS-FACEに基づく分析を通して	大上晋太郎, 中下恵, 秋山智, 他	日本看護学会論文集:成人看護 38号 P39-41	2008
		CCUに入院した患者家族のコードとコーピングの実態	岡村真理, 瀧崎幸子, 吉村美紀, 他	済生会下関総合病院院内看護研究集録 平成19年度 P1-6	2007
		ICU・CCUにおける家族看護の向上を目指して CNS-FACE 家族アセスメントツールを活用して	杉本由紀子, 星野恵里, 内山裕子, 他	名古屋市立大学病院看護研究集録 2006号 P63-66	2007
	ツール使用による介入・評価	ICU入室患者の家族のコードとコーピングに関する調査 入室経路と家族への説明内容の違いによる比較	秋保誠子, 小関郁子, 佐藤貴美	日本看護学会論文集:成人看護 36号 P223-225	2006
		自殺企図患者の母親とのかかわりから家族コードを考えるプロセスとコードによる分析,CNS-FACEの測定結果を母親へのインタビュー結果と比較検討して	濱本実也, 尾野敬明, 道元元裕	エマーゼンシー・ナーシング 17巻7号 P693-702	2004
		ICUにおける家族看護の充実を目指した試み 危機モデルに沿った情報ツールの活用と強化学がもたらした意識変容	森口順巳, 小笠原理恵, 山本陽子, 他	家族看護 2巻2号 P129-137	2004
		集中治療室に緊急入室した患者の家族援助の検討 「Motherの重症患者の家族コード」から作成した家族対応チェックリストの使用を試みて	大岩悦子, 瀧山見子, 田中茂美, 他	日本看護学会論文集:成人看護 34号 P114-116	2004
看護師のジレンマ	看護師のジレンマ	ICUにおける家族介入方法の検討 家族介入用紙の再評価	今村沙希子, 関澤智香, 小林愛, 他	甲信救急集中治療研究 19巻1号 P15-19	2003
		ICU・CCUにおける家族援助向上のための取り組み 家族援助チェックリストを活用して	石原清子, 高津優子, 小暮亜由美, 他	日本看護学会論文集:成人看護 31号 P206-208	2001
		ICUにおいて家族に対し看護師が体験する倫理的ジレンマ 延命治療に関する意思決定を行った家族の場合	飯田沙織	日本看護学会論文集:精神看護 29号 P38-40	2009
		ICU看護師の家族面会におけるジレンマ アンケート結果からの分析	奥畑藍	日本看護学会論文集:成人看護 38号 P12-14	2008
		クリティカルケア看護場面における看護師の語り 倫理的ジレンマを中心に	杉田久子	日本赤十字看護大学紀要 19号 P45-56	2005
		救命領域におけるDNR決定後の家族に関わる看護員の認識	村上恵美	神奈川県立看護教育大学看護教育研究集録 28号 P418-425	2001
		ICUにおいて家族に対し看護師が体験する倫理的ジレンマ 延命治療に関する意思決定を行った家族の場合	飯田沙織	日本看護学会論文集:精神看護 29号 P38-40	2009
		ICU看護師の家族面会におけるジレンマ アンケート結果からの分析	奥畑藍	日本看護学会論文集:成人看護 38号 P12-14	2008

る。家族が求める援助を提供していくためには、その前提として認識のずれがあることを知ることが重要である。

「家族の実態」では、家族の心理や体験を明らかにする研究、家族の意思決定に関する研究、家族をシステムとして捉えその家族システムの健康について調査する研究などがみられた。緒方らによる家族8名を対象とした研究¹¹⁾では、家族員が状況に適切に対応できるための看護援助のあり方は、家族員が回復の期待を持ち続けることができる援助、家族員が医療への信頼を実感できる援助、家族員が周囲の支援を効果的に使うことができる援助、家族員が看病を長期的視野に入れることができる援助が重要であると述べられていた。家族の意思決定に関する研究は4件であり、延命治療に関するもの3件、渡航心臓移植に関するもの1件であった。意思決定の際の家族の心情や必要な情報などはすでに調査され明らかとなっているが、今後ますます専門化・高度化していく医療環境において、これらの情報を活かした具体的な援助が開発されることが望まれる。家族をシステムとして捉えた研究は、榊による研究¹²⁾1件のみであった。クリティカルケア看護の場では、家族は危機に陥りやすい。家族をシステムとして捉えて流動的円環的コミュニケーションが促進されるような援助、閉鎖的になりがちな家族システムを開放システムへと導くための様々な社会資源を取り入れた援助など、今後も家族をシステムとして捉えた研究は盛んに行われていかなければならない。

「ケア内容」では、ターミナルケア、エンゼルケア、インフォームド・コンセント、精神的ケア、面会、抑制、ケア参加、術中訪問など、特定の場面や具体的な状況における家族に対するケアに関する研究がみられた。ターミナルケアに関する研究は、ERやICUでの終末期に対する看護師の認識に関する研

究3件、海外のクリティカルケアの場におけるターミナルケアに関する文献研究1件、ターミナルケアにおけるICUと一般病棟の相違を明らかにする研究2件、具体的な看護実践を明らかにしたもの1件、症例検討5件であった。ターミナル期における患者・家族への援助の必要性や困難さが述べられていた。高野は、ICUでの終末期ケアが困難であると思う理由は、「ICUの環境」に関する内容が最も多く、次いで「時間の制約」「死の様相」「家族の要因」に関する内容であった¹³⁾と述べていた。また、ICUの終末期における看護行為は一般病棟と多くは共通していたが相違する看護行為もみられ、それらには、病棟における終末期の状況や看護師の終末期の期間のとらえ方が影響していた。ICU看護師は終末期ケアを困難に感じながらも、その困難を打開するような看護行為を行っていた¹⁴⁾、とも述べていた。クリティカルケアの場で働く看護師は家族を含めたターミナルケアが必要であると感じているが、積極的な治療介入を行う病床環境や時間的制約からどのように介入してよいかかわらず、困難や不全感を抱きやすい。ターミナルケアは、クリティカルケア同様、看護における全領域にわたって必要なケアである。ERやICU・CCUなどのクリティカルケアの場において、患者の尊厳を守り家族の悲嘆過程を促進できるターミナルケアを提供できるよう、具体的な援助の開発などさらなる研究が期待される分野である。インフォームド・コンセントは、医師からの病状説明に関するもの1件、看護師からの看護計画説明に関するもの2件、全ての情報提供に関するもの2件、症例検討1件であった。また、抑制に関する研究は4件であり、家族が抑制についてどう感じているかを調査したもの3件、看護師の抑制に対する認識1件であった。ケア参加とは、患者に対するケアに家族の参加を促すという援助で

あるが、3件であった。その3件の内容は、家族にケアへの参加を促して参加観察を行い、ケア参加終了後に半構成的面接を行うもの¹⁵⁾、家族とともに口腔ケアを行うもの¹⁶⁾、家族に患者に触れるよう言葉をかけその効果についてアンケートを行うもの¹⁷⁾、であった。これらはクリティカルケアの場における具体的な援助方法の開発となり得る研究であり、今後さらに深めていくべき課題であると考えられる。

「ツール関連」とは、ツールの開発・検証を行うものや、多種多様のツールを用いて調査や介入を行う研究のことである。用いられているツールで最も多かったものは山勢らが開発したCNS-FACEであり、関連する研究は8件であった。山勢らによる家族211名を対象とした研究¹⁸⁾では、CNS-FACEの測定項目を基に、情報、接近、保証のニードと問題志向的コーピングが入院経過に従って高くなる傾向が見られ、情緒的サポートと情動的コーピングは経過に従って低くなる傾向にあった、という結果が得られていた。また、大上らによる家族81名を対象とした研究¹⁹⁾では、情報・保証のニードが経過とともに低下するのに対し、接近のニードは経過とともに上昇した、という結果が得られていた。また、秋保らによる家族62名を対象とした研究²⁰⁾では、入室3日間で最も高かったニードは「接近」であった、緊急入室と比べて予定入室の場合は「保証」のニードが高かった、生命の危険があると説明された家族は「情緒的サポート」「情報」「情動的コーピング」が高かった、という結果が得られていた。これらの結果から、緊急入院直後の家族のニードとコーピングの変化が明らかとなっている。入院直後から退室までのニードの変化に応じ、それらのニードを満たすことのできる援助を行うことが重要である。また、具体的な援助方法の開発が進んでいけばCNS-FACE

を使用し個々の家族アセスメントを行いながら、援助が最も奏効する介入時期を測定した上で、看護介入が行えるようになるのではないだろうか。CNS-FACE以外では、辰巳らの研究²¹⁾によってICUにおける患者家族アセスメントツールが開発され、検証も行われていた。尺度開発は、患者家族のニードの明確化につながるため、これらの尺度を用いた研究や臨床実践が今後期待される。

「看護師のジレンマ」では、延命治療に関する意思決定を行った家族に関連するジレンマ、面会に関するジレンマ、倫理的ジレンマについての語りからの考察、DNR(Do Not Resuscitate)決定後の家族に関わる看護師の認識についての研究がみられた。クリティカルケアの場では生死に関わる緊迫した状況が多く、患者に意識がない場合は家族にその治療的決断が委ねられる。しかし、家族は必ずしも患者の意志を反映した決断ができているとは言えない。そのような状況であるため、看護師は専門職としての立場と個人としての感情が複雑に絡まり合いジレンマを抱きやすい。家族の意思決定を支える援助を行うためには、倫理的ジレンマを体験している看護師のジレンマを語る場が必要であり、語りの共有はクリティカルケア看護実践における問題解決の意思決定をサポートする大切な要素となる²²⁾²³⁾と述べられていた。

【結 論】

研究対象別分類では家族(家族・患者、家族・看護師含む)を対象とした研究が70%以上、内容別分類では「家族のニード」「家族の実態」で30%以上、方法別分類では実態調査が多いことからわかるように、家族の体験、感情、ニードについては徐々に明らかになってきており、家族に関するアセスメントツールの開発・検証も進んでいる。今後はそ

れらツールの検証とツールを用いた具体的な援助を開発していくことが求められている。そして、具体的な援助を開発するためには、介入・評価研究が行われる必要がある。今後は、介入・評価研究による新たな援助の開発、現在行われている援助の効果の測定や改善、方法の統一など実践に即した研究が求められていると言える。また、クリティカルケアの場では生死に関わる状況が多く、看護師はそのような中で瞬時に判断し行動していかなければならない。そのような倫理的ジレンマの多い場で働く看護師が、成長し、身体的にも心理的にも健康でいられるよう、デスカンファレンスやジレンマを語り合う場の設定など看護師自身へのケアの開発が求められている。さらには看護学生や看護職者を対象としたデスエデュケーションの実施など看護学教育への還元も必要であるということが示唆された。

クリティカルケア看護領域における家族看護研究は、本格的に開始されてからまだ10年と歴史が浅く、家族に介入する研究は始まったばかりである。本研究で明らかになったことを活かし、研究と実践の融合を図り、よりよい援助が提供できるよう取り組んでいく必要がある。

【引用・参考文献】

- 1) 小川龍：集中治療医学の過去・現在・将来．日本集中治療医学会雑誌．11(1)．1-3．2004
- 2) 山勢博彰：わが国のクリティカルケア看護に関する研究の動向．看護研究．38(2)．3-15．2005
- 3) 井上智子：第1章クリティカルケア看護概論．井上智子．クリティカルケア看護理論と臨床への応用．1-15．日本看護協会出版会．2009
- 4) 井上智子：日本クリティカルケア看護学会設立趣意書．日本クリティカルケア看護学会ホームページ．6月5日．2010．<http://accn.umin.jp/aboutindex.html>．
- 5) 前掲2)
- 6) 藤原正恵・岩山朋裕・穴吹浩子：日本での過去5年間におけるクリティカルケア看護領域の研究の特徴．インターナショナルナーシングレビュー．32(1)．96-100．2009
- 7) 今岡万里・泊祐子：重症集中ケアにおける家族看護過程の特徴．家族看護学研究．12(3)．125-132．2007
- 8) 工藤由美・田中千鶴子・曾我辺洋子他：集中治療室における家族看護の実践と家族による評価．昭和大学保健医療学雑誌．5号．1-8．2008
- 9) 浦野瞳・湯口奈見子・生駒音美：ICU入室患者家族への情報提供の重要性 Molter の「重症患者家族のニード」を利用したアンケート調査の結果から．日本看護学会論文集 成人看護 I 37号 158-160 2007
- 10) 小松さゆり・齋藤真由美・柿崎敦子他：CCUに緊急入院した患者の家族に対する援助の検討 Molter の重症患者家族ニードの活用秋田県農村医学会雑誌．50(1)．9-11．2004
- 11) 緒方久美子・佐藤禮子：ICU緊急入室患者の家族員の情緒的反応に関する研究．日本看護科学会誌．24(3)．21-29．2004
- 12) 榊由里：救命救急センター入院患者の家族システムの健康に関する記述的研究．日本クリティカルケア看護学会誌．1(3)．60-70．2006
- 13) 高野里美：ICU(集中治療室)の終末期ケアを困難にする要因 ICU看護師の調査結果から．死の臨床．25(1)．78-84．2002
- 14) 高野里美：集中治療室(ICU)での終末期における看護行為 一般病棟との相違．臨床死生学．8(1)．26-35．2003

- 15) 千葉美香・首藤由美子・石川照江：ICU患者家族のケア参加による精神的効果．愛媛労災病院医学雑誌．1(1)．56-59．2004
- 16) 伊藤愛：人工呼吸器装着中患者の反応を引き出すための関わり 患者と家族のコミュニケーションの発展を図るために．大津市民病院雑誌．9．36-38．2008
- 17) 村田奈緒子・近藤千恵子・宮澤祐：ICU入室患者の家族面会時の介入 家族が患者に触れることで生じる感情や効果．長野県看護研究学会論文集．29回．82-84．2009
- 18) 山勢博彰：重症・救急患者家族のニードとコーピングに関する構造モデルの開発 ニードとコーピングの推移の特徴から．日本看護研究学会雑誌．29(2)．95-102．2006
- 19) 大上晋太郎・中下恵・秋山智他：入室経路の違いによるICU入室患者の家族のニードとコーピングに関する調査 CNS-FACEに基づく分析を通して．日本看護学会論文集 成人看護Ⅰ．38号．39-41．2008
- 20) 秋保誠子・小関郁子・佐藤貴美：ICU入室患者の家族のニードとコーピングに関する調査 入室経路と家族への説明内容の違いによる比較．日本看護学会論文集 成人看護Ⅰ．36号．223-225．2006
- 21) 辰巳有紀子・羽尻充子・中村尚美他：ICU患者家族のニーズの抽出とニーズ測定尺度の開発．日本集中治療医学会雑誌．12(2)．111-118．2005
- 22) 飯田沙織：ICUにおいて家族に対し看護師が体験する倫理的ジレンマ 延命治療に関する意思決定を行った家族の場合．日本看護学会論文集 精神看護 39号 38-40．2009
- 23) 杉田久子：クリティカルケア看護場面における看護師の語り 倫理的ジレンマを中心に．日本赤十字看護大学紀要．19号．45-56．2005